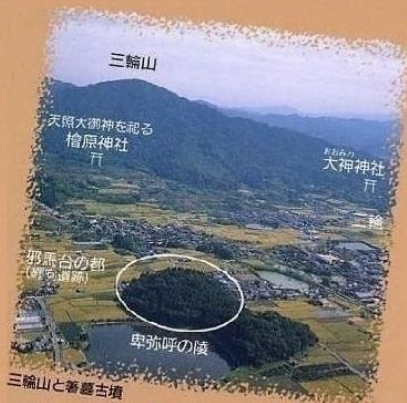


やま と
邪馬台 三国志

歴史物語のあらすじ 最新版



神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

邪馬台国史が見えた **邪馬台国時代の歴史を物語に**
中国の三国志、日本の戦国時代・幕末をはるかに凌駕する世界に誇れる歴史です。

前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天之国、オロチ敵之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が立て続けに興った。

二世紀後半、伊弉諾の御世、畿内勢が謀反して大乱が勃発した。倭奴国王朝は瓦解し、日向に天照大御神（日神）を仰ぐ高天、大倭に天照大神（日神の婿養子）率いる邪馬台国に分裂した。

二二〇年代、日神は大倭に遷座して、倭の女王ヒミコに共立された。

三世紀後半、日向から東征した磐余彦（神武）が火明鏡速日（火瓊瓊杵の児、海幸彦）の建てた日本朝を倒し、橿原に大和朝廷を開いた。

弥生史の常識や通説を歴史的観点から検証していくと、戦前から信じて疑うことのなかった皇統万世一系も、「百余国を束ねる統一王朝など存在しなかった」とする戦後の学校教育も、間違いだらけと分かります。邪馬台史の全貌がとんと解明できない原因は、ここににあります。司馬遷の信念や和辻哲郎博士の説に立ち返り、一から考え直す以外にありません。

縄文晩期、呉太伯ら子孫が建てた天之国は、前三世紀の倭国（高天）王朝、一世紀の倭奴国王朝（天地）、大乱後の南九州では高天系の日隈・日前・和国の名で再興された後、大和朝廷として蘇った。

二世紀後半、大乱に見舞われた倭奴国王朝は、伊弉諾・日神の天照大御神・火瓊瓊杵・火火出見・磐余彦率いる高天系、水天神天照大神・日神改めヒミコ・垂仁・景行率いる瑞穂の邪馬台国に分裂して覇権を争い、三世紀後半、和王磐余彦（神武）が東征して橿原に大和朝廷を樹立し、倭奴国王朝再興を叶えた。東西に二朝が並立した本物語では、記紀の矛盾が自然消滅する上、中国史書、考古学結果、神社の縁起、各地の伝承・地名とも概ね合致する。視点を変えると、こんな見方のできる歴史だった。

★前五〜前四世紀、戦国中国の覇権争いに敗れて、日本列島に逃げ込んだ呉王夫差と越王句践の子孫らが建てた天之国と敵之国は、邪馬台国末期に至るまで延々と覇権争いを繰り返してきた。結果は、戦国期の中国史とは正反対に、天之国が天下を制して大和朝廷を開いたのです。

★縄文中期に北九州に興った那珂つ国（中つ国）も、弥生期に興る天之国と敵之国も、不老不死実現を掲げながら独自の蓬莱郷づくり、神仙の国（神国）づくり、天竺流常世づくりに奮闘努力してきた。

★日神が切実に願った倭国・倭奴国王朝の再現や、海幸彦が火火出見に命乞いして誓った誓約は、火火出見を襲名した磐余彦が大和朝廷の初代天皇即位後に、晴れて叶った。即ち海幸彦（火明饒速日）末裔は、物部姓と十握剣を賜り、磐余彦火火出見の宮殿を夜も昼も守護する役目を背負わされた。

★高皇産霊による葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武尊による日高見の蝦夷討伐は、布都御魂の十握剣、日矛、草薙剣（天叢雲剣）の威光の下で、「刃に血塗らずして勝つ」を達成した実話だ。

これを国是に掲げた邪馬台史は、三国志や戦国・幕末期を遥かに凌ぐ世界中に誇れる歴史でした。

倭の女王ヒミコ（撞賢木蔽之御魂天疎向津媛）の一生

倭奴国王朝六代女系天神の宗女として誕生→**向津姫**、**若日女**→**天照大御神**、**日神**→倭の女王**ヒミコ**→**天照大御神**

1 **倭奴国**（倭十豊葦原中つ国）**王朝六代女系天神**、**天之尾羽張神**の時代（一六〇年前後〜一八〇年代前半）

一六五年頃、六代女系天神の宗女として怡土の天宮（天上の都）で誕生→**向津姫**、**天之国**の**若日女**

※豊受（天照）皇太神（熊野櫛御氣野、出雲では山王、牛頭天王、大穴持、大國主）→（向津姫に婿入り）

婿入前の彼は、伊雑宮の巫女玉柱屋姫（瀬織津姫？）、尾張海部家の姫らを妃に娶り、天鹿見山をこしらえた

一八〇年代中頃、三輪氏らと組んで謀反し、邪馬台国（瑞穂の蔽之国王朝）→**ヒミコ**の**天**（蔽）之**国王朝**（倭）

↓**火明鏡速日の日本朝**に発展）を興して**天叢雲**、**天照大神**、**水天神**、**倭大物主**、**大蛇**と語る↓大乱に発展

※大乱時、**天照大神**妃で分身の**瀬織津姫**（**天照大神**荒魂）↓**広田国**（西宮市）に布陣して合戦を采配

2 **王朝瓦解後**、**高千穂郷に逃れた高天**（日高+天_之国、倭と語れず）**期**（一八〇年代後半〜二二〇年代前半）

天_之国の**天宮**、**高千穂宮**では、**天照大御神**、**日神**（七代女系天神）（**齡二十代前半で、日神に即位**）

※稚産靈↓**日神**分身の**稚日女**↓丹生都比売、丹生都比売神社（和歌山県）祭神↓伊射波神社（鳥羽市）誓約

3 **天照大神**、**高皇産靈**と称して高千穂宮に赴き、**葦原中つ国**平定↓**日神**に**大政奉還**↓**高天**との統一王朝、誓約

4 **天**（蔽）**之**国（倭）**王朝期**（二二〇年代前半〜二四〇年代後半）（**齡五十代後半で大倭纏向宮に遷座**）

纏向入りして倭の女王**ヒミコ**（日継の御子、日の巫女）に即位。亦の名は**撞賢木蔽之御魂天疎向津媛**

※**天照大神**分身の**瀬織津姫**→**ヒミコ**分身（**撞賢木蔽之御魂天疎向津媛**、**天照大御神**荒魂）に転身

5 **女王退位後**、**笠縫邑**（檜原神社の鎮座地）や**伊勢五十鈴宮**では、**天照大御神**

※笠縫邑では**天叢雲**剣で以て**天照大神**を祭祀。五十鈴宮では、**天叢雲**剣で**天照大神**、**檜御柱**で**高皇産靈**を祭祀

6 **二四〇年代末**、**五十鈴宮で逝去**（享年八十歳）↓**箸墓円形部**（円壇↓五段重ね円墳）に埋葬された

7 **三〇四年**二月二三日、**鳥見山中**の祭場（桜井茶臼山古墳）で、夫の御魂と共に**皇祖天神**に配された

※**内宮**祭神は**天照大御神**。荒祭宮祭神は**天照坐皇大御神**荒御魂とも**天照大御神**荒御魂とも。一説では**瀬織津姫**。

※**内宮別宮**伊雑宮（**天照大神**の遥宮）祭神は、**天照大御神**御魂、相殿祭神は**玉柱屋姫命**。廣田神社（西宮市）祭

神は**天照大御神**荒御魂（**撞賢木蔽之御魂天疎向津媛**、一説では**瀬織津姫**）。生田神社祭神は、**稚日女尊**

『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ 最新版 目次

◇家長と祭器 ◇呉越の歴史／秦漢の統一王朝 ◇王朝の変遷 ◇大和朝廷の成り立ち

◇倭国／倭奴国の国のかたち ◇本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕 1

◇本書の王系譜2 ◇邪馬台国の国々／皇孫火瓊瓊杵の日前（投馬国）西都（宮崎県西都市大字妻）と

天孫天火明の日高見国東都（千葉県市原市惣社）

倭国の生い立ち／那珂つ国／天之国とオロチ敵之国王朝／倭国王朝／豊葦原中つ国と伊都国の王朝

倭奴国王朝（倭国（高天、日高十天之国）＋豊葦原中つ国（奴国））…一世紀前半／倭国大乱 …一八五年勃発

◇倭国大乱と瑞穂の邪馬台国勃興（大乱勃発時の戦場↓神戸市東部 決戦場↓島根半島の闇見国（黄泉国））

東西の王朝／瑞穂敵之国王朝（大倭唐古に都する邪馬台国）⇨水天神天照大神がオロチ敵之国王朝を再現

〔大乱後の高天（倭の国名を奪われた倭奴国）⇨高千穂宮に天宮して、天照大神を日神（日天神）に奉る〕

〔吾田に降臨した火瓊瓊杵が笠沙宮に都した国⇨日隈（日前、後に日前に改名）⇨日隈（熊野家）の継承国〕

倭の女王／倭国（天（敵）之国王朝、関西⇨副都伊都国・奴国）⇨東西の王朝が合体して女王を共立…二二〇年代前半

〔倭女王ヒミコ⇨天照大神が日天神を降り、邪馬台国の纏向上之宮に遷座。伊都国（吉野ヶ里）に副都設置〕

〔勢力圏⇨倭国（西都市妻）に都する火瓊瓊杵の日前⇨東都（市原市惣社）に都する天火明の日高見国〕

日本王朝と日前の対立／日本（日本の倭）朝⇨火明饒速日（火瓊瓊杵の児火明、海幸彦）が倭国を継承した王朝

〔日前（日前の継承国）⇨火火出見（天火明の児蒼津別、山幸彦）率いる王朝⇨後に和国と改名〕

天下は一つ、家は一つ（神武東征）／磐余彦が祖父の火火出見を襲名して日向から東征 …二八五〜二九八年

大和朝廷の成立（和国が大倭国と共立した大和家に日本家・豊葦原中つ国・敵之国等を併合…三〇一（辛酉）年）

〔物部氏⇨帰順後、軍事筆頭職に拔擢された可美真手（火明饒速日の児）の姓。布都御魂剣で朝廷を守護〕

※天之国、倭、高天、倭奴国、大和朝廷は、呉太伯ら子孫。オロチ敵之国、葦原家、伊都国は、越王句踐子孫

◇邪馬台国、南九州天之国・高天系の対立 ◇本書の王系譜3 ◇本書の王系譜4

◇伊弉諾夫妻の実子、伊弉諾の主な養子と人質、妃の分身菊理媛と主な養女（大宜都比売、埴山姫、稚産霊ら）

◇本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕 5

邪馬台国時代

倭奴国王朝

伊都国王朝
～倭国王朝～那珂つ国

- ◆ 縄文晩期の那珂つ国……死返玉・道返玉など玉八つに加えて、熊の神籬・蜂の領巾など玉つ宝十種
- ◆ 前五世紀の**天之国**……日鏡、奥つ鏡・辺つ鏡など鏡三面
- ◆ 前四世紀の**敵之国**……死返玉など玉五つ(もと那珂つ国祭器)、奥つ鏡・辺つ鏡(もと天之国祭器)に加えて、**敵之国**本家の宗像家 軍団を指揮する八握の細形銅劍(神璽)、船団を指揮する蛇の領巾など瑞宝十種
- ◆ 前四世紀の熊族(熊襲)：銅矛、日鏡(もと天之国祭器)、玉三つ(もと那珂つ国祭器)、熊の神籬など熊族神宝
- ◆ 前三世紀の**倭国王朝(高天)**……北方系銅鏡 日隈(熊野家)……瓊矛、日鏡・玉三つ、熊の神籬など日隈神宝
- ◆ 豊葦原中つ国の天叢雲……天璽の天叢雲劍、死返玉など玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、蛇の領巾など瑞宝十種
- ◆ **敵之国**宗家の宗像家……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)、蛇の領巾など瑞宝十種
- ◆ **倭奴国王朝**初代女系天神の**天常立**……光武帝から賜る天璽の方格規矩鏡
- ◆ 日隈(熊野家)の伊奘諾……神璽の金印「漢委奴国王」、神璽の瓊矛・日鏡・熊の神籬など日隈神宝、布都斯魂劍で倭奴国王朝と天神を守護
- ◆ 邪馬台国の水天神**天照大神**……新たに鑄た天璽の天叢雲劍(中細銅劍) 火天神**天鹿見山**……天璽の羽羽矢
- ◆ 宗像家宗女の田心姫……玉五つ、奥つ鏡・辺つ鏡、八握の細形銅劍(天叢雲劍)・蛇の領巾など瑞宝十種
- ◆ **日神の天照大御神**……石窟戸前で鑄た天璽の伊勢大神(三角縁神獸鏡) 倭女王**ヒミコ**……伊勢大神、魏帝鏡(方格規矩鏡)、神璽の金印「親魏倭王」、豪族に配る鏡(祭祀用八咫鏡と魏帝鏡)
- ◆ 素戔嗚……日矛・日鏡など熊野家神宝、日前鏡、布都斯魂の十握劍で大蛇(天照大神親子)退治
- ◆ 高千穂宮の**高皇產靈**……高千穂宮赴任前に鑄た布都御魂の十握劍、自身の神像としての天叢雲劍(中細銅劍)(高千穂宮に赴く**天照大神**) 布都御魂劍に、「刃に血塗らずして倭国統一(高天十邪馬台国)」を誓う
- ◆ 日前の皇孫**火瓊瓊杵**……天神の御子と印す羽羽矢、石窟戸前で鑄た八咫鏡(日前鏡)・天叢雲劍など三種宝物
- ◆ 日本朝の**火明饒速日**……神璽の十握劍二振り、天神の御子と印す**天璽の羽羽矢**、天神**天照国照彦火明**……鏡作郷で鑄た神璽の天照御魂神(天璽の鏡の形代、天照国照彦火明命) 天璽の瑞宝 布都斯魂・布都御魂の十握劍二振りに、倭国統合(日本朝による和国併合)を誓う
- ◆ 和の磐余彦……羽羽矢、日前鏡、葬送用八咫鏡、敵から手にした日矛(熊野権現御魂)・布都御魂劍
- ◆ **大和朝廷**の神武(磐余彦)……笠縫邑で新たに鑄た神璽の八咫鏡と草薙劍(天璽の鏡劍の形代)
- ◆ **火明饒速日子孫**の物部氏……布都御魂劍・瑞宝十種を授かり、大和朝廷・磐余彦火火出見の宮殿守護を誓う

◇呉越の歴史／秦漢の統一王朝

前五〇〇年過ぎの春秋末期、呉越も支配してきた楚は、にわかには台頭した呉に敗北し、はるか西の都に都を移した。これ以降、中国では食うか食われるかの戦国時代が始まった。周公にあこがれた孔子が魯国で周政治を再現すべく試みたのも、悟りを開いた釈迦（仏陀）、ゴータマ・シッタールタ）が鹿野苑や祇園精舎で弟子たちに説法してきたのも、この頃だ。

前四九四年、太伯につながる呉王夫差が越王句踐率いる大軍を打ち破った。句踐は兵五千と共に会稽山に立てこもったが、逃げる隙間もないほどに包囲された。進退窮まった句踐が平身低頭して和睦を願い出ると、夫差は臣下の反対を押し切って和睦を許し、兵をさっさと引き上げた。

☆夫差は、荊蛮の千余家に担がれた太伯が自国を句呉と称して以来、二十余代目にあたる。

前四八九年、夫差は、斉では景公没後に大臣らが権勢を争っていると聞くと、北に出兵して艾陵（山東）で斉を叩いた。その後も斉に留まったままで、斉や魯の南方を攻略した。

前四八二年春にも北に軍を送り、黄地（河南）で諸侯らと会盟した。中国の覇者となって、周室を安泰せしめたいと望んだからだ。このとき、呉軍の精銳はあらかたが夫差に随行して、残る老人や婦女子が太子と共に留守を預かっていた。

句踐はその隙を突いて、水軍二千・訓練の行き届いた兵士四万・近親の武士六千・近衛兵千を総動員して呉の都に不意討ちをかけ、太子を殺害してしまった。

前四七八年、越はまたも呉に大勝してその都を包囲すること三年だった。

孔子の死から六年後の前四七三年、越軍はついに呉の都を落とした。句踐は呉の国内を隅々まで平定すると、大軍と共に淮水を渡って斉・晋の諸侯らと徐州で会合し、ついで貢ぎ物を周室に献上した。周の元王は使者を遣わして句踐に胙を賜い、覇者の称号・侯伯を与えた。

この時期、越軍は長江や淮水の東を自由に行き来できたことで、諸侯らは越王句踐を慶賀して覇

王として称えた。

故国を失つた呉の遺民は、命からがら各地を放浪する者、江東から船出して南岸地帯をさ迷う者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出する者が跡を絶たなかつた。六代後の越王無疆も北に進軍して斉を攻め、ついで西の楚を伐つて中原の諸侯と覇権を争つた。前三三四年、彼は再び北上して斉を伐とうとしたが、翻意して楚の討伐に向かつた。楚の威王はこれを迎え撃つて越の所領をことごとく奪つた。

真つ先に故国からはじき出された越オロチ一門やその傘下は、楽土を探し求めながら南の広東・江南の海岸地帯、北の朝鮮半島、東海上に散つて行く他なかつた。

解体の憂き目にあつた越オロチ本家筋は、互いに小国を立てて相争い、ある者は王、ある者は君と称して長江南の海岸地域に割拠したが、いつしか楚に入朝して臣下に成り下がつていた。

その後、西の辺境にあつた秦が中央集権化と工業化に力を注ぎ、最強国にのし上がつてきた。残りの六国は秦の膨張を食い止めようと連衡や合従を繰り返したが、秦王は前二三〇年に韓、前二二三年に楚、前二二二年に燕、続いて前二二一年に斉を滅ぼし、天下統一を果たした。

秦王政は史上初めての統一国家を築くと、全国を三六郡に分ち、その郡をいくつもの県に細分して、郡には守なる行政長官と尉なる軍政長官、県に令なる官職を設けた上で、中央から郡や県に官僚を送り込んで中央集権化を押し進めた。次に、自ら封禅して始皇帝と称した。

前二一〇年、その始皇帝が急死すると、反対派が一気に勢いづいた。楚国から立ち上がった項羽と劉邦が秦を倒し、先ずは項羽が覇者に立つたが、五年後の前二〇二年、人気のある劉邦（高祖）が垓下の一戦で項羽を破つて漢を興し、ついで臣下に担がれる形で皇帝の座に就いた。

☆越王無疆から七代目の揺は、諸侯らが秦を平らげるのを手助けした。漢の高祖は揺に越王の称号を授けて、再び先祖の祭祀を継がしめた。

◇王朝の変遷

I 那珂つ国なかにⅡ五帝期黄帝の一門(地の神) 十后土の国(黄泉国) ↓福岡平野に都す……前二十四世紀

Ⅱ 那珂つ国なかに+天あめ之国(太伯・呉王夫差の子孫、天(太陽)や日の神を崇拜)、天地……前五世紀中頃
↓福岡平野の那珂川流域に都す

Ⅲ 嚴いつ之国王朝Ⅱ夏后小康庶子・越王句踐の子孫、越オロチ族↓福岡平野に都す ……前四世紀後半
嚴之国家の宗像家↓一門を各地に策封↓吉野ケ里(伊都国)、吉備(？)、出雲(佐太国)、撰津(小千族)、

奈良盆地(三輪オロチ、三輪氏)、北陸(越オロチ、越智氏) 那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

Ⅳ 倭国王朝Ⅱ天(嚴)之国十日高国(韓一門)、高天 ↓唐津湾岸/福岡平野に都す ……前二二〇年頃
Ⅴ 豊葦原中つ国王朝Ⅱ豊国(漢一門) +葦原家(嚴之国一門) +中つ国 ……前二世紀後半
↓福岡平野の早良/春日に都す。嚴之国家の宗像家↓宗家に祭り上げられ、玄海・宗像に閉居

Ⅵ 伊都国王朝Ⅱ吉野ケ里のオロチ族十大倭家 ……前一世紀中頃
↓吉野ケ里から福岡平野の春日や糸島平野怡土に乗り込み、怡土に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

Ⅶ 倭奴国王朝Ⅱ倭(高天) +豊葦原中つ国 +宗像家、天地↓怡土に天宮(天上の都)す ……一世紀前半
倭国大乱↓皇太神が謀反し、邪馬台国(瑞穂の嚴之国王朝)を樹立↓倭奴国王朝分裂……一八〇年代中頃

副都オロチ勢・豊葦原瑞徳国 倭・日隈・大山祇神ら中つ国勢 豊葦原中つ国
畿内 日向・熊襲 出雲



……二八五〜二九〇年代末

Ⅷ 大和朝廷

和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・嚴之国等を併合 ……三〇一年

物部氏Ⅱ軍事筆頭の重臣に抜擢された火明饒速日の児・可美真手が、布都御魂剣を賜り、朝廷を守護

◇大和朝廷の成り立ち

『史記』断髮文身した呉の太伯ら子孫↓呉王夫差一族：周の伝統を継承し、天(日)を崇拝

↓前五世紀初め、江東から渡来して天之国建国…倭国王朝…倭奴国王朝…邪馬台国

『史記』晋分家の韓一族↓半島から渡来して日高国建国…高天…天(厳)之国…高天↓①大倭に倭国王朝共立…日神の高天

『史記』・「倭人伝」会稽に移封された夏后小康庶子無余…天(厳)之国…高天↓②火瓊瓊杵が熊襲に日前建国…神武の大和朝廷

↓越王句踐末裔↓前四世紀、江南から渡来…豊葦原中つ国…火火出見・磐余彦の和国

↓オロチ厳之国王朝一派の水穂厳之国…オロチ厳之国王朝の宗像家…神武の大和朝廷

オロチ厳之国王朝の宗像家…神武の大和朝廷

※断髮文身した越王句踐末裔：越の伝統を継承し、蛇神崇拜↓前四世紀、江南から渡来↓オロチ厳之国王朝樹立

↓豊葦原中つ国王朝↓伊都国王朝↓邪馬台国(瑞穂の厳之国王朝↓天(厳)之国王朝↓日本王朝)に発展

前二三世紀? 前五世紀前半 前四世紀後半 前三世紀後半

前二世紀後半 前一世紀中頃 一世紀前半 前二世紀後半 前一世紀中頃 一世紀前半

前二世紀後半 前一世紀中頃 一世紀前半

↓豊葦原中つ国王朝↓伊都国王朝↓倭奴国王朝(高天、天之国が日高と組み、王朝樹立)

(吉野ヶ里の厳分家)

一八〇年代中頃、一九〇年前後、二二〇年代前半 二八〇年代前半

倭国大乱 天宮高千穂宮の高天 ↓ 熊襲に天降った日限・日前 ↓ 和国(いずれも古の倭奴国)

↓王朝分裂 皇太神(↓天照大神)が樹立、日神(↓倭の女王ヒミコ) ↓ 海幸彦(↓火明饒速日)

畿内邪馬台国(瑞穂の厳之国王朝) ↓ 天(厳)之国王朝(倭国) ↓ 日本(やまと)王朝

出雲の葦原中つ国/奈良盆地の大日本(大倭)国

二八〇年代中頃、二九〇年代末、三〇一年

↓和王磐余彦(神武)東征↓和国が天下統一し、大和朝廷樹立(和国が大倭国と組み、倭(奴)国王朝再興)

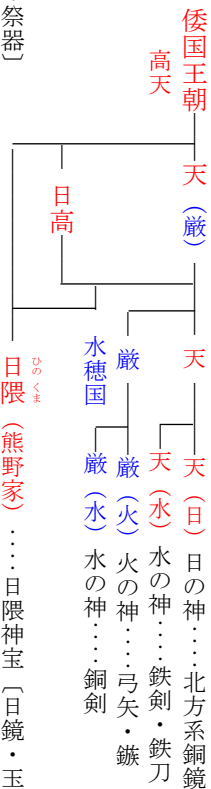
『旧唐書』「倭国日本伝」、「倭国は古の倭奴国なり。・・その王、姓は阿每(あめ、天)氏なり」、

「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」

◇倭国／倭奴国の国のかたち

倭国王朝^{やまと} || 天(厳)^{あめ} 之国^の十日高国^{ひたか} (戦国七雄・韓の一門) || 高天^{たかま}

前二〇年頃成立



〔国の祭器〕 太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄劍・鉄刀

〔上古の祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他
『晋書』や『魏略』逸文、「倭人は）太伯の末裔と自ら言う」

倭奴国王朝^{やまと} || 倭 + 豊葦原中つ国 || 天地^{あめつち} 倭国 || 天(厳) 之国十日高 || 高天 一世紀前半成立



初代天神の女帝 || 天常立

初代倭王 || 女帝の入り婿

豊葦原中つ国王・国常立

豊葦原中つ国 (豊国 || 火神、葦原家 || 厳分家、中つ国 || 地の神)

日限(熊野家) ... 瓊矛・日鏡など日限(熊野家) 神宝

〔国の祭器〕

奴国 || 中つ国、后土国

開見国 || 月詠国、月夜見国、夜見国、黄泉国、鬼国

太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄劍・鉄刀
〔上古の祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝十種、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他

◆本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕 1

184年(大乱勃発)

210-230年

250-270年

285年頃

300年頃

水天神

天照大神

天照大神
天鹿兎山
豊葦原中つ国の姫
豊葦原中つ国の姫

長子↓忍穗耳に養子入し、饒速日と名のる

日子女王襲名
日子女王

彦湯產隅
彦湯產隅

筒木真若

彦湯產隅↓日葉酢姫ら五姉妹
天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

天照大神

豊葦原中つ国の姫

1 女王ヒミコ

大倭遷座

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

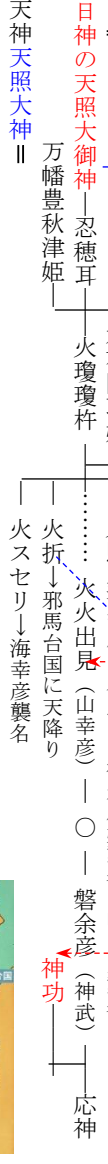
天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)

天火明(二代垂仁)



※水天神天照大神 Ⅱ
マガダ国大王、

山王、牛頭天王、神皇產靈、
大穴持、佐太大神、大國主、
月読、月神、熊野櫛御氣野、
御饅津神、豊受(天照)皇太神、
天御中主、天叢雲、倭大物主、
所造天下大穴持、大蛇、小蛇、
豊受大神、高皇產靈、熊野権現



◇本書の王系譜2

◇大倭(おおよまと)国

◇大日本(おおよまと)国

和国と共に大和朝廷樹立

孝安 — 孝靈

孝元

開化 — 御間城入彦五十瓊殖(崇神)

彦狭嶋

彦太忍信 — 大足彦(崇神、南海道・東山道都督、倭王) — 竹内宿禰

倭迹迹日百襲姫(倭迹迹姫襲名、五代倭女王)

吉備津彦(五十狭芹彦) — 西道(山陽道) 將軍

稚武彦

稻日大郎姫 — 日本武

◇邪馬台(やまと)国

敵之国王朝/天(敵)之国王朝(倭国)/日本(やまと)王朝

朝廷の軍事筆頭職・物部氏

饒速日(火天神天鹿兒山の長子、初代垂仁) — 味間見(物部氏遠祖)

狭穗姫

誉津別(火火出見) … 誉津別(火折) — 仲哀 — 誉田別(氣比大神)

豊城入彦(東山道都督) — 彦狭嶋(倭倭家入籍、播磨海道都督、西南藩屏將軍)

豊鍬入姫(二代倭女王) — 天香語山(天鹿兒山襲名、尾張氏の祖、東海道都督、高倉下)

天香山(尾張家遠祖) — 可美真手(味間見襲名) — 物部氏の祖

天火明(二代垂仁) … 火明饒速日(三代垂仁、日本大物主大神)

彦火明 — 天照國照彦火明饒速日(現人神の天神)

大田田根子 — 神君・鴨君の祖

日葉酢姫ら五姉妹 — 倭姫(倭倭家入籍、大足彦) — 日本武

◇高天(高天) ↓ 日前(高天) ・ 日前(高天) (妻国、投馬国、熊襲) / 和(ヤマト) 国

大和朝廷(三〇一年樹立)

火瓊瓊杵 ……

火火出見(山幸彦)

磐余彦

(神武) … 崇神 …… 心神

火折 ↓ 誉津別

大和朝廷の開祖

火照 ↓ 海幸彦 ↓ 火明 ↓ 火明饒速日

神功(四代倭女王、仲哀皇后)

火スセリ(海幸彦襲名) ↓ 吾田隼人らの祖

八幡(心神)

◇邪馬台国の国々／皇孫火瓊瓊杵の日前（投馬国）西都と天孫天火明の日高見国東都

①（帯方）郡より倭に至るには、海岸に沿って水行し、韓国をへて或いは南し、或いは東して、その北岸狗邪韓国に至るまで七千余里。

②（狗邪韓国より）はじめて一海を渡り、千余里にして対馬国に至る。

③また一海を渡ること千余里、・・一大（支）国に至る。

④また海を渡り、千余里にして末盧国に至る。

⑤東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。⑥東南して奴国に至るまで百里。

⑦（狗邪韓国より）南して投馬国に至る、水行二十日。

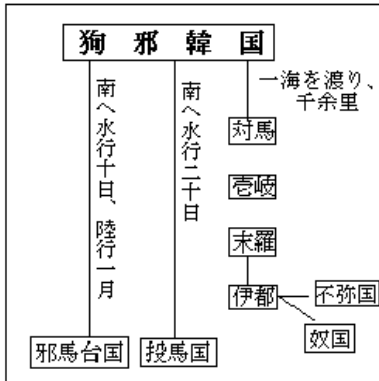
⑧（狗邪韓国より）南して邪馬壹（台）国に至る、女王の都する所にして、水行十日、陸行一月。

⑨次に奴国ありて、これ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国ありて、男子を王と為す。女王に属さず。

①⑥を地図上で追っていくと、末盧国は唐津、伊都国は佐賀平野、奴国は筑後川南の旧山門郡・旧大和町辺りに到る。伊都国のあった佐賀平野には、後世の国府が置かれた旧大和町、徐福を祀る金立神社、吉野ケ里遺跡がある。⑦、⑧については、狗邪韓国を起点にとると、本書の筋書き通り、投馬国は宮崎県西都市妻地区、邪馬台国は奈良盆地の大倭磯城唐古や纏向に到達する。

後者の国域は琵琶湖以南の南近畿一帯、すなわち滋賀県や京都府の南部、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県の全域、さらに兵庫県南東部に及び、七万戸（約四〇万人）もの人口を擁していた。

☆当時の河内地方には、内海の河内湖が上町台地から生駒山麓



にかけて広がっていた。淀川上流には巨大な巨椋湖、その北に琵琶湖が広がっていた。濃尾平野西部には、広大な湿地帯内を奔放に暴れまわる木曾川・長良川・揖斐川が伊勢湾に流れ込んでいた故、邪馬台国はさながら大きな島のごとく思われてきた。

ここに「記紀」の対馬、邪馬台・倭、大倭、投馬については、同じ漢字、同じ読み、同じ地名・国名が「記紀」や現地名にもあり、対馬、倭・日本・大和・山門、大倭・大日本、妻・都万と呼ばれてきた。対比してみよう。対馬国→長崎県対馬。投馬→西都市大字妻、西都市大字妻の都万（都萬）神社。邪馬台国、倭→「記紀」の倭・日本、奈良県の大和国、筑後川南の旧山門郡・旧大和町。大倭→「記紀」の大倭・大日本、奈良県の大倭神社。

双方を見比べると、これら現地名が史実に基づくのは明白だ。

これらを踏まえた上で、この時代の歴史について、このように考えた次第だ。

《大乱前、日隈（熊野家）の伊弉諾は、北九州に都する倭奴国（倭国十豊葦原中つ国（奴国）、天地）王朝の六代女系天神・天之尾羽張から東方統治と神国・常世づくりを任されたが、四苦八苦してきた。将にその時、常世思想に加えて仏教や学問に並外れた才のある大穴持（天竺マガダ国王、山王、牛頭天王）が豊葦原中つ国王にのし上がってきた。

伊弉諾は彼の噂を耳にするや、天竺流常世づくりを実現したいと念じた余り、彼を養子に取り込んで日隈（熊野家）の皇太神に据え、次に東方を管轄する副都・月の都（唐古、田原本町）の統治を任せきった。ついで天神の意向に沿った形で、向津姫（天神宗女）の婿養子に押し込んだ。

だが皇太神は、三輪氏と組んで東海から北九州を席卷して、月の都唐古に都する瑞穂厳之国王朝（邪馬台国）を建て、天照大神と語った。その結果、伊弉諾も向津姫も素戔嗚も、熊襲に走った。

この考えの下で、倭、高天、出雲、南九州に目をやると、その地の歴史が垣間見える。

三輪氏が太氏と共立した大神家が、大倭国に取って代わり、邪馬台国の筆頭家に躍り出てきた。

一九〇年頃、向津姫が高天の高千穗宮に天宮して日神の天照大御神に担がれると、臣下らは石窟戸前で八咫鏡二面（日前鏡と真経津鏡）を鑄造して、真経津鏡を天璽として奉獻した。一方、素戔嗚は新羅に出奔後、奥出雲に潜入して熊野家と豊葦原中つ国の再興に奮闘したが、頓挫した。

二一〇年代前半、素戔嗚夷子の、大己貴（大穴持と大国主襲名）は、葦原中つ国再建を果たすや、越（高志）オロチ勢と組んで邪馬台国を攻め立てたが、二二〇年代初め、日神と高皇産靈（高千穗宮に赴く天照大神）が送った遠征軍に戦わずして跪き、天神の御子に国譲りすると誓わされた。二二〇年代前半、日神が皇孫（天孫）火瓊瓊杵に吾田降臨を詔した直後、天照大神は高千穗宮を発つて大倭に向かった。道中の出雲や丹後で、大己貴と彦火明（天火明）を連れて大倭に戻ると、天火明に日高見国建国、常世づくり、丹後と尾張の統治、さらなる東の領土拡大を下命した。

同じ頃、日神と素戔嗚も高千穗宮を発つて大倭に向かったが、その途上で夫が急逝した。纏向入りした日神は、邪馬台・高天の双方から倭女王ヒミコに共立されると、素戔嗚をヒミコに次ぐ地位の天王と女王補佐役の卿に、大己貴を都の治安・外交を司る太夫に任じて所造天下を急がせた。纏向上之宮に都した女王は、倭国（邪馬台国）北九州の倭国を直轄する一方、邪馬台国以東の天火明率いる日高見国、及び奴国以南の火瓊瓊杵率いる日前（投馬国）も間接統治してきた。

大乱前、月の都唐古に副都して東方統治に勤しんできた大倭家は、大乱後、天照大神に屈して伊弉諾嫡子の蛭児を商売繁盛の神として推戴したが、過去に敵に寝返った不忠を理由に要職にありつけず、租税の徴収や管理、国々の市場監察など閑職しか賜らなかつた。ところがヒミコ亡き後に日本朝が興るや、火明饒速日に絶対服従を誓うと同時に家名も大日本家と改めた結果、一転して軍事筆頭職に返り咲き、大倭都督として唐古や葛城に都することも天皇と語ることも許された。河内では、南国から舞い戻った天兒屋が生駒山西麓に領地を賜り、女王の祭祀を助けてきた。